国際社会文化研究所紀要　第23号（2021年）

シーア派のペトロ（シャムウーン）観
――同派におけるキリスト教的伝統の利用と解釈について――

平野　貴大*

Shī‘ī Views Concerning Petro（Sham‘ūn）: Shī‘ī Utilization and Interpretation of Christian-Oriented Traditions

Takahiro HIRANO*

Within normative Christian traditions, Petro is considered one of the Twelve Apostles of Jesus and the first Pope within the Roman Catholic tradition. In the Qur’an, there is one verse that infers the story of Petro’s preaching in Antioch, and some narrations about him can be found in Islamic traditions, especially Shī‘ī traditions. However, the Shī‘ī views concerning Petro are neither well known nor covered in previous academic studies. Here, we discuss how Petro is described in Shī‘ī narrations and how Shī‘ī scholars utilize and interpret “Christian traditions” within the framework of their thought. We find that Petro is described as a successor of Jesus and a previous example of the Shī‘ī imam in a manner similar to ‘Alī as a successor of the Prophet Muḥammad. Shī‘ī interpretations of Petro’s story demonstrate that Shī‘ī scholars were willing to utilize Christian-oriented traditions, but by deliberately interpreting them in harmony with their doctrine. Specifically, this was done to authorize their doctrine of Imāma by retrospectively ascribing the characteristics of imams to early Christian saints.

はじめに

シーア派とは，スンナ派と並びイスラームの二大宗派を形成する宗派である。シーア派は預言者ムハンマドの死後に，彼の従弟であり娘婿であるアリーが宗教指導者（イマーム）になったと主張し，イマーム位を代々アリーの子孫に認めてきた。本稿が主題とするペトロ（アラビア語でシャムウーン Sham‘ūn）はイエス・キリストの十二使徒の 1 人であり，カトリックの主張によれば初代ローマ教皇であったとされる。イエスやペトロはイスラームとは無縁であると思われるかもしれないが，イエスはイスラームでもムハンマドの前の預言者の 1 人と見なされ，救世主として再臨するメシアと信じられている（次節参照）。また，本稿で分析するように，ペトロもイスラームの聖典クルアーンの中で暗示的に言及されており，とくにシーア派の伝承集には彼に関する多くの物語が伝えられている。

イスラームのイエス観に関して多くの研究があり，本邦では松山のクルアーンに基づく研究が最も体系的である。シーア派におけるイエスに関する伝承については Muntazir al-Qāim の研究があ

＊ 日本学術振興会特別研究員 PD

る[1)]。それに対して，イスラームにおけるペトロの位置づけに関しては，これまで研究者たちの関心を集めてこなかった。そこで，本稿ではシーア派の中で伝承されるペトロの物語とその解釈を主題として扱う。本稿の第 1 の目的は，スンナ派のペトロ観との対比によってシーア派思想におけるペトロの重要性を明らかにすることである。本稿の第 2 の目的はシーア派のペトロ観の分析を通じて，同派におけるキリスト教的伝統の解釈の一端を示すことである。

本稿の構成は以下の通りである。シーア派のペトロ観を扱ううえで，シーア派の概説とイスラームのイエス観をまとめておく必要があるだろう。そのため，まず本稿の第 1 節ではシーア派のイマーム論と同派の専門用語の意味を概説する。第 2 節では，ペトロの考察に不可欠な人物であるイエスに関するイスラームの見方を概略する。その上で第 3 節では，クルアーンにおけるペトロ観をもとにスンナ派とシーア派共通のペトロ観を示し，第 4 節でシーア派独自のペトロ観の特徴を明らかにする。

1. シーア派のイマーム論

シーア派とスンナ派の分裂の発端となったのは，預言者ムハンマド（632 年没）の後継者問題である[2)]。預言者ムハンマドの教友（ṣaḥāba，預言者に会ったことのある信奉者たち）の多数派はメディナ（現サウディアラビア）の有力者たちによって選出されたアブー・バクルをカリフ（khalīfa，イスラーム共同体の統治者のこと）として認めた。アブー・バクル以降の歴代のカリフたちを承認していったのが，後のスンナ派である。それに対して，最初期のイスラーム教徒の中の少数派は，預言者ムハンマドの娘婿であり従弟のアリーだけが預言者の後継者になる資格を有すると主張した。アリーを支持する集団が「アリーの党派（シーア・アリー，shī‘a ‘Alī）」と呼ばれ，彼らが後の「シーア派」となったとされる。「アリーの党派」はアリーが預言者ムハンマドから直接後継者指名を受けた「イマーム（imām）」であると主張した[3)]。

このように，シーア派を他派から区別できる教義が同派のイマーム論である。イマーム論はシーア派思想の根幹であるがゆえに，伝承・知性的推論によって緻密な議論が為されてきた。イマーム論については多くの研究があるため詳しくはそれらを参照されたい[4)]。本節では，イマーム論に関する教説の中でもペトロの物語に関連するもののみを選び説明する。

(1) イマーム性

イマームとは，大罪からも小罪からも誤りからも免れた無謬（ma‘ṣūm）の宗教指導者である。イマームたちは預言者ムハンマドの後継者であり，アリーを初代イマームとして代々彼の子孫にイマーム位が継承されたとされる。現在のシーア派の圧倒的多数派は 12 人のイマーム位を信じるため，「十二イマーム派」とも呼ばれる。イスラームではクルアーンに次ぐ権威を持つテキストとして「ハディース（ḥadīth）」というものがある。ハディースとはスンナ派では預言者ムハンマドの言行録を指すが，シーア派では預言者とイマームたちの言行録を指す。

「イマーム」には別の呼び名が複数あり，シーア派文献の中では彼らは「ワスィー（waṣī）」，「フッジャ（ḥujja）」とも呼ばれる。これらの類義語はそれぞれ若干意味が異なる。ワスィーの字義は「遺言執行人」であり，預言者の後に来る遺言執行人を指す。フッジャとは預言者とイマームを含む「神の証（ḥujja Allāh）」という概念である[5)]。

(2) 指名（naṣṣ）

預言者とイマームは選挙で選ばれるのではなく，神か前任者による直接的な「指名（naṣṣ）」によって選ばれる。そのため，イマームは必ず前任者からの指名を受けており，かつ死ぬ前に後任者を指名するとされる[6)]。たとえば，神が預言者ムハンマドを指名し，預言者がアリーを指名し，アリーは長男ハサンを指名したとされる。なお，シーア派の認める 12 人のイマームたちは以下の順である。①アリー（‘Alī, d.661），②ハサン（al-Ḥasan, d.669），③フサイン（al-Ḥusayn, d.680），④ザイヌルアービディーン（Zayn al-‘Ābidīn, d.711），⑤バーキル（al-Bāqir, d.732），⑥サーディク（al-Ṣādiq, d.765），⑦カーズィム（al-Kāẓim, d.799），⑧リダー（al-Riḍā, d.818），⑨ジャワード（al-Jawād, d.835），⑩ハーディー（al-Hādī, d.868），⑪アスカリー（al-‘Askarī, d.874），⑫マフディー（al-Mahdī, 869 年誕生で 874 年から現在までお隠れ）[7)]。なお，12 代目イマームが人類史上最後のイマームとされ，彼の後にイマームは現れないと信じられている。

(3)「地上はフッジャを欠くことはない」

シーア派の真正な伝承に，「地上はフッジャを欠くことはない（al-arḍ lā yakhlū min ḥujja）」というものがある[8)]。フッジャとは預言者たちとイマームたちの総称であるため，この伝承は，人類の初めから最後の日まで必ず預言者かイマームの誰かが地上に存在しているという原則を示す。ムハンマド以降に預言者はおらずイマームだけが存在し，現在は 874 年から姿を隠している 12 代目イマームの時代とされる。12 代目イマームはマフディーと呼ばれ，最後の審判より前に地上に再臨する救世主であると信じられている[9)]。

イスラームの有名な伝承によれば，歴史上存在した預言者の数は 12 万 4 千とされ，最初の預言者がアダム（アーダム）で最後の預言者がムハンマドである。さらに，シーア派では一部の預言者たちには，彼らのワスィー（前述のように「イマーム」の類義語で，「遺言執行人」の意味）がいるとされる[10)]。イスラーム史観の中では預言者の存在が知られていない「空白期間（fatra）」という概念がある[11)]。その代表的な例が，ムハンマドとイエスの間の「空白期間」である。「空白期間」の問題はシーア派において非常に大きな問題となる。同派のイマーム論は「地上はフッジャを欠くことがない」という原則を持つため[12)]，ムハンマドとイエスの間の 600 年近い期間のフッジャは誰なのかが大きな問題となるのである。

2. イスラームのイエス観：スンナ派とシーア派の共通点と相違点

本稿の主題はシーア派のペトロ観であるが，ペトロの位置づけを論じるうえでイスラームのイエス観が前提となる。そのため，本節ではまずイスラームにおけるイエス観を概略する。

クルアーンやイスラームの神学書では，イエスはアラビア語でイーサー・ブン・マルヤム（‘Īsā b. Maryam，マリヤの子イエスの意味）と呼ばれる。イエス（イーサー）の名前はクルアーンには 25 回言及されている。例えば，クルアーン 3 章 45 節には，「彼のマスィーフ・イーサー・ブン・マルヤム（ismu-hu al-Masīḥ ‘Īsā b. Maryam）」という文言があり，ここでの「マスィーフ（al-masīḥ）」という単語はメシアを意味する。クルアーンの複数個所の記述やハディースに基づいて，イスラームにおいてもイエスは預言者の 1 人と見なされ，終末の日より前に地上に再臨する救世主と見なされている。

以下に，前述の松山（2018）を要約し，イスラームのイエス観の特徴を5点に挙げて概略する[13]。

①受胎告知：

マリヤ（マルヤム）は未婚で姦通を犯していなかったが，イエスを身ごもり，天使ガブリエル（ジブリール）がイエスの懐胎をマリヤに伝えた（クルアーン19章18-21節）。

②イエスによる奇跡：

泥で形作った鳥に息を吹き込むと神の御許しで本物の鳥になった，盲人とハンセン病患者を治癒，死者を復活させた，など（クルアーン3章49節）。

③イエスの預言者性：

イエスは神の使徒（rasūl）の1人（クルアーン3章49節），インジール（al-Injīl，福音書）を与えられた（クルアーン3章48節），イエスには礼拝と浄財が課されている（クルアーン19章30-32節）。

④イエスの神性の否定：

クルアーンでは明確にイエスの神性が否定されている。「かのマスィーフ，マルヤムの子イーサーはアッラーの使徒であり，マルヤムに授けられた彼の御言葉であり，彼からの霊である。それゆえ，アッラーと彼の諸使徒を信じ，『三である』と言ってはならない。やめよ，お前たちにとってより良い。アッラーは唯一の神に他ならない」（クルアーン4章171），「『アッラーとはかのマスィーフ，マルヤムの子イーサーである』と言った者は確かに信仰を拒んだ」（クルアーン5章72節）[14]

⑤イエスの磔刑の否定と彼の昇天：

イエスは十字架にかけられておらず，生きたまま天に挙げられた（クルアーン4章156-158節）。イスラームではイエスの処刑が否定されるため，イエスの死後3日後の復活も否定される。

以上のように，イスラームは①マルヤムの処女懐胎，②イエスによる奇跡の信仰，という教義をキリスト教と共有する。それに対して，③～⑤はイスラーム独自の教説である。イスラームではイエスの神性が否定され，彼の預言者性が認められている。イエスが磔刑に処されたことは否定され，イエスは生きたまま天に挙げられ，いずれメシアとして地上に再臨するとされる。

これらの教義に関してはクルアーンに明文が存在しているため，スンナ派とシーア派全体の中で異論は存在しない[15]。それに対して，イエスの救世主としての再臨の根拠は，主にハディースに求められる[16]。スンナ派の伝承によれば，イエスはダッジャール（Dajjāl，偽救世主）と戦い，イエスは世界を統治し地上を平和で満たし，諸宗教と諸宗派をイスラームのもとに統一するという[17]。それに対して，イエスとは別の救世主としてマフディーが現れるという学説もある[18]。ただし，スンナ派ではあくまでも終末の前に現れる救世主の主体はイエスであり，マフディーなる人物はイエスの補助者にとどまっている。それに対して，シーア派は救世主としてのマフディーをお隠れ（アラビア語の専門用語でガイバ，ghayba）中の12代目イマームと同定し，スンナ派とは逆にイエスが12代目イマーム・マフディーの宰相として仕えると主張している[19]。

以上の分析をもとにイスラームのイエス観をまとめると次のように言えよう。スンナ派とシーア

派両派では聖典クルアーンの明文に基づき，イエスの預言者性と彼の救世主性の承認，彼の神性の否定，彼の磔刑の否定に関しては合意している。両派の相違点は，ハディースに基づく彼の救世主としての役割についてであり，シーア派はイエスより 12 代目イマームの救世主性を重視している。

3. クルアーンにおけるペトロ

本節ではペトロを暗示するクルアーンの節に関するスンナ派とシーア派両派の解釈の取り上げ，イスラームにおけるペトロの位置づけを明らかにしたい。

ペトロはアラビア語のイスラーム文献ではシャムウーン・ブン・ハンムーン・サファー（Sham ʻūn b. Ḥammūn al-Ṣafā）と呼ばれている。アラブのキリスト教徒はギリシア語由来の名前で彼をブトルス（Buṭrus）と呼ぶ[20]。日本語でも彼のことをペトロ，ペテロ，シモンなどと呼ぶことがあるが，シモンに近い音が「シャムウーン」であり，ペトロ，ペテロに近い音が「ブトルス」である。クルアーンにはシャムウーン，ブトルスという名前に言及する箇所は 1 つも存在しないものの，クルアーンの次の節がペトロの物語を示すとされる。

> 彼らに譬えとして町（アンティオキア）の住民を挙げよ。その時，われら（神のこと）は彼らに 2 人を遣わしたが，彼らはその 2 人を嘘として否定し，そこでわれらは「**3 人目（thālith）**」で強化した。そこで彼ら（3 人の使者）は言った，『まことに，我らはお前たちへ派遣された者である』と（クルアーン 36 章 13-14 節）。

上記のクルアーンの節ではシャムウーンの名前は言及されていないものの，多くのクルアーン解釈書においてこの節の「3 人目（thālith）」はペトロを指すものと解釈されている。クルアーンのこの節で暗示されているペトロの物語はスンナ派・シーア派両派のクルアーン解釈書・ハディースの中で詳細に伝えられている。以下にまず，イスラームの多数説に基づいて，この節の物語を要約して示す。その上で，スンナ派とシーア派の両派におけるこの節の解釈の共通点と相違点を分析する。

> **物語の要約**：イエスが 2 人の弟子をアンティオキアに送り，同地で一神教の布教をさせた。当時のアンティオキアの王は多神教徒であったため，イエスの 2 人の弟子による一神教の布教に激怒し，その 2 人を捕らえて投獄した。それを聞きつけたイエスは彼らの 2 人の救出と布教の成功のために，ペトロを「3 人目」の布教者として同地の王のもとへ派遣した。しかしながら，ペトロは王の信じる神々を信じたふりをして 1 年間ほど過ごし，同地で病人を治癒し，死者を復活させるなどの奇跡を行って見せた。王はペトロを気に入り，彼を自身の側近にした。ある時ペトロは，牢獄にいる 2 人の布教者を尋問し，もし彼らの主張の中に真理があるなら彼らの宗教に改宗しようと王に提案した。そして，2 人が王とペトロの前に呼び出されて，2 人はペトロに誘導される形で尋問を受ける。2 人は神の許しによってハンセン病患者を治し，盲人の目を見えるように治癒した。また，死後 7 日経った子供（一説では王ないし高官の息子）を復活させた。別の伝承では，2 人の使者は公然と病人や盲人の治癒や死者の復活を祈り，ペトロはこっそりと神に祈願し，ペトロを含めた 3 人の祈願によって奇跡が実現したという。それらの奇跡を目撃した王とその臣民たちは改心し，ペトロらの説くイエスの宗教に改宗した。

このようにして，ペトロは 2 人の捕縛された仲間を救出しただけでなく，アンティオキアの王とその臣民の改宗に成功した[21)]。

以上のストーリーはスンナ派，シーア派にほとんど共通している。筆者は調べられた限りでも，上記の「物語の要約」部分の最後の注に記したように，バガウィー（al-Ḥāfiẓ al-Baghawī, d.516/1122-3），クルトゥビー（Shams al-Dīn al-Qurṭubī, d.671/1272-3）らスンナ派の有名な古典クルアーン解釈者たちによる著作の中で上記の物語が描かれている。クルトゥビー，バガウィーはペトロを「十二使徒の長（ra’s al-ḥawāliyyīn）」と描写しており[22)]，ムウタズィラ学派の神学者ザマフシャリー（Abū al-Qāsim al-Zamakhsharī, d.538/1143-4）のクルアーン解釈書にも同様の記述がある[23)]。

しかしながら，クルアーンのこの節がペトロに言及したものであるかについてスンナ派の中には異論も存在する。有名なクルアーン学者イブン・カスィール（Ibn Kathīr, d.774/1372-3）の伝える 1 つの説では，この物語の中で最初に派遣された 2 人の使者がペトロ（シャムウーン，Sham‘ūn）とヨハネ（アラビア語でユーフナー，Yūḥnā）」[24)]であり，「3 人目」がパウロ（アラビア語で，ブールス，Būlus）であるという[25)]。すなわち，イブン・カスィールが伝える 1 つの説によれば，ペトロは最初に派遣されて逮捕された 2 人の使者のうちの 1 人とされており，パウロこそがペトロを救出し宣教を成功に導いた人物であったということになる。

以上の分析によって，スンナ派のペトロ観については以下のことが言える。同派の多くの学者たちは，クルアーンにおけるペトロに関する暗示的記述を根拠として，ペトロをイエスの「高弟」かつ「十二使徒の長」と考えてきたということがわかる。しかしながら，一部の学者はクルアーンの記述がパウロを指すものであると解釈することで，必ずしもペトロの重要性を認めていないことがわかる。

このようにスンナ派ではクルアーン 36 章 14 節の「3 人目」が誰を指すかを巡り見解の対立が見られるが，筆者の調べた限りにおいてシーア派ではそれがペトロを指すことに異論はないようである。シーア派におけるペトロの位置づけは次節で扱うが，ここで一例だけシーア派の例を挙げておきたい。現代のシーア派学者たちから最もよく参照されるクルアーン解釈書の 1 つであるタバータバーイー（Moḥammad Ḥoseyn al-Ṭabāṭabā’ī, d.1979）の『クルアーン解釈における秤（*al-Mīzān fī Tafsīr al-Qur’ān*）』では，シーア派学者アイヤーシー（Muḥammad b. Maṣ‘ūd al-‘Ayyāshī, d.320/932）とタブリスィー（Faḍl b. al-Ḥasan al-Ṭabrisī, d.548/1153-4）のクルアーン解釈書をもとに上記の物語を詳しく説明している。その中で，ペトロは「十二使徒の長（ra’s al-ḥawāliyyin）」，「彼（イエス）のワスィー（waṣī-hu）」と描写されている[26)]。本稿第 1 節で述べたように，ワスィーとは預言者たちの正統なる後継者を意味する言葉で，シーア派では「イマーム」と類似の意味で用いられる。スンナ派ではペトロを「十二使徒の長」と見なす見解は存在するが，彼をイエスの後継者とは呼んでいなかった。そのため，ペトロをイエスの正統な後継者と見なすことがシーア派のペトロ観の特徴であると言える。

4. シーア派におけるペトロ観

シーア派においてペトロが重要視されるのは，預言者イエスと預言者ムハンマドの間の「空白期間（al-fatra）」の問題とシーア派イマーム論を両立させるためであると考えられる。前述のように，

同派のイマーム論において，アダムから最後の審判の日まで必ずフッジャ（預言者とイマーム）が存在しなければならないという原則がある。フッジャの不可欠性ゆえに預言者ムハンマドの死後もフッジャが存在しなければならず，それがアリーを初代とする 12 人のイマームたちであるとされる。この原則を背景に，874 年に信徒の前から姿を隠した 12 代目イマームは超人的に長生きし今も地上のどこかに隠れ続けているという前述の「お隠れ（ガイバ，al-ghayba）」の教義が確立された[27]。このように，「地上はフッジャを欠くことはない」という教義はシーア派の正統性に関わるものである。

預言者ムハンマド以降の歴史は上記のように説明できたとしても，「イエスとムハンマドの間の空白期間の間のフッジャは誰なのか」という問題が残る。筆者の考えでは，シーア派思想においてこの空白期間を埋めるために重要な役割を果たすのがペトロである。本節はこの仮説を立証するために，以下の 5 つの観点を分析していく。

（1）ペトロはイエスのワスィーである

シーア派の伝承の中では，ペトロは十二使徒の長に留まらず，イエスの正統なる後継者ワスィーと明示されている。シーア派におけるワスィー性の系譜に関しては 10 世紀のシーア派歴史学者マスウーディー（‘Alī b. al-Ḥuṣayn al-Maṣ‘ūdī, d.345/956）の『イマーム・アリー・イブン・アビー・ターリブのワスィー性の立証（*Ithbāt al-Waṣiyya li-al-Imām ‘Alī b. Abī Ṭālib*）』が最も体系的に扱っている[28]。同書はアダムからシーア派 12 代目イマームまでのフッジャの物語を順番に言及していくものであるが，同書の中のイエスの章の次がペトロ（シャムウーン）の章となっている。マスウーディーはペトロの章の中で彼を「ワスィー（waṣī）」とは表現していないものの，イエスの章では，イエスがペトロを「ワスィーに任命した（awṣā）」と記述している[29]。

ペトロがイエスのワスィーであるという思想は，他の多くのシーア派文献の中にも見出すことができる。筆者が確認できた限り，ペトロのワスィー性を主張したシーア派最古の文献は，アリーの直弟子スライム・イブン・カイス（Sulaym b. Qays al-Hilālī, d.76/695-6）に帰される『スライム・イブン・カイスの書（*Kitāb Sulaym b. Qays*，以下『スライムの書』と呼ぶ）』である[30]。『スライムの書』の中には，「イエスのワスィー，ペトロ（Sham‘ūn waṣī ‘Īsā）」や「彼（ペトロ）をマリヤの子イエスがワスィーに任命した（ilay-hi awṣā ‘Īsā b. Maryam）」というアリーの言葉が収録されている[31]。『スライムの書』は彼の弟子によって一部が書き替えられたという説もあるが[32]，その可能性を考慮しても，ペトロがイエスのワスィーであるという教説はスライムが伝えるように早くてアリーの時代に，また遅くともアリーの孫弟子の時代にはシーア派の中で成立していたと言える。

その後，ペトロがイエスのワスィーであるという伝承は多くのシーア派学者たちによって支持され，彼らの著作に収録されてきた。遅くとも 10 世紀以降のシーア派には伝承主義的潮流と合理主義的潮流の 2 つの思想的潮流が存在してきたが，現代までの両潮流を代表する学者たちがその伝承を伝えている[33]。そのため，ペトロがワスィーであるという教義は初期からシーア派の中に存在し，現代まで継承されてきたと言える。

（2）ペトロの宗派のみが救済に与る

イスラーム神学の中の 1 分野である分派学では，預言者ムハンマドの言葉を典拠として，イスラームを含む諸宗教の中の分派の数を限定している。イスラームの有名な伝承によれば，ユダヤ教徒は 71 の宗派に，キリスト教徒は 72 の宗派に，イスラーム教徒は 73 の宗派に分派するとされ，それらの分派の中でも来世で救済されるのは各宗教の中の一派のみであるとされる[34)]。宗派を問わずイスラームの分派学者たちは，自分自身の信奉する宗派こそがイスラームの 73 の分派の中の唯一救済される 1 派であると主張してきた。ここで「イスラームの考えるキリスト教の中での救済される宗派は何か」という問いが生まれよう。シーア派はこの問いに対して，「ペトロの宗派」と回答する。

「ペトロの宗派の救済」という教義を最初に収録したシーア派文献は，上記のアリーの直弟子スライムの著作である。スライムが伝えるところ，アリーは次のように言ったという。

> ユダヤ教徒は 71 の宗派に分派した。そのうち 70 派は火獄に，1 派は楽園に［訳者補注：入る］。それ（その一派）はムーサーのワスィー，ヨーシャウ・ブン・ヌーン（モーセのワスィー，ヨシュア，Yūsha‘ b. Nūn waṣī Mūsā）に従った派である。キリスト教徒は 72 の宗派に分派した。71 派は火獄に，1 派は楽園に［入る］。それ（その一派）は，イーサーのワスィー，シャムウーン（イエスのワスィー，ペトロ，Sham‘ūn waṣī ‘Īsā）に従った派である。そして，このウンマ（イスラーム共同体のこと）は 73 の宗派に分派するだろう。72 派は火獄に，1 派は楽園に［入る］。それ（その宗派）は――自らの胸に手を当てて――ムハンマドのワスィーに従った派である[35)]。

スライムの伝えるアリーの伝承によれば，アリーは明確にペトロの宗派だけの救済を主張し，かつ，アリーは自分自身とペトロを同じ「預言者のワスィー」として位置づけている。この伝承はほとんど同じ文言でサファヴィー朝期のシーア派伝承主義の碩学マジュリスィー（Muḥammad al-Bāqir al-Majlsī, d.1111/1699）らも収録している[36)]。

シーア派ではアリーの伝承と同様の内容の伝承が預言者ムハンマドの言葉としても伝わっている。6 代目イマーム・サーディクによれば，天使ガブリエル（ジブリール）が預言者ムハンマドに次のように言ったという。

> ムハンマドよ，シース（Shīth，セツ）に従う（tawallā）者はシースによって，シースはアーダム（アダム）によって，アーダムは神によって救済される。（中略）シャムウーン（ペトロ）に従う者はシャムウーンによって，シャムウーンはイーサーによって，イーサーは神によって救済される。アリーに従う者はアリーによって，アリーはお前（預言者ムハンマド）によって，お前は神によって救済される[37)]。

以上の 2 つの伝承の表面上の意味から，アリーの宗派たるシーア派こそがイスラームの 73 の分派の中で救済に与る唯一の宗派であるのと同様に，キリスト教の中ではペトロの宗派こそが救済に与るというシーア派の主張が確認できる。ワスィー性に関する専門書である上記のマスウーディーの

書はあまりこの問題についてあまり言及していないが，イエスの後の分派に関して「信仰を持つ宗派はペトロとともにある（farqa mu’mina ma‘a Sham‘ūn）」と述べている。注意すべきは，キリスト教の中の救済される宗派が「ペトロの宗派」だとシーア派伝承で明言されているものの，「ペトロの宗派」がキリスト教の実際のどの宗派を指すのかについては一切言及されていないことである。そのため，シーア派が「ペトロの宗派」の正統性を主張する時には，必ずしもシーア派がキリスト教の特定の宗派を支持しているということではない。

上の 2 つの伝承の中では，「ペトロの宗派の救済」という主張は「アリーの宗派の救済」というシーア派的教説と密接に関連している。ここから，シーア派においてイエスのワスィーたるペトロが，ムハンマドのワスィーたるアリーの先例として位置付けられているということがわかるだろう。

(3) イエスによるペトロの指名，ペトロによる後継者指名

シーア派が伝承するペトロの物語の中には，シーア派イマーム論の根幹的教義である「指名（naṣṣ）」の思想を見出すことができる。本稿の第 1 節で述べたように，イマーム位の継承は，前任のイマームか預言者から直接的に後継者指名を受けることによって為される。ペトロに関するシーア派伝承では，イエスによるペトロへの後継者指名，およびペトロによる次のワスィーへの後継者指名の状況が説明されている。

マスウーディーによれば，イエスが神によって天に挙げられる前夜に，イエスは「弟子たちを集め，ペトロをワスィーに任命し（awṣā），彼らに彼（ペトロ）への服従を命じた」という。イエスがペトロを後継者指名したという伝承は，『スライムの書』にも収録されており[38]，サファヴィー朝期の前述の伝承学者マジュリスィーもその伝承を自らの著作に収録している[39]。10 世紀後半のシーア派伝承主義の碩学シャイフ・サドゥークが収録する次の伝承は，ペトロに関する後継者指名の状況を端的に示している。サドゥークが伝えるところ，預言者は次のように言ったという。

> （アッラーは）彼（イエス）を召し上げようとお望みになった際に，アッラーの光（nūr Allāh）と知恵（ḥikmatu-hu），彼（アッラー）の書の知識（‘ilm kitābi-hi）を，彼の信仰者たちに対するカリフ（khalīfatu-hu）であるシャムウーン・イブン・ハンムーン・サファーに委託するように彼（イエス）に啓示し給い，彼（イエス）はそうした。そのため，シャムウーンは尊厳比類なきアッラーの命令を実行し，イスラーイールの民の中でイーサー――彼に平安あれ――の全ての教説に追従し，不信仰者たちと戦い続けた。彼に従い，彼と彼がもたらしたもの（mā jā’ bi-hi）を信仰する者こそ信仰者（mu’min）であり，彼を否定し反逆する者こそ不信仰者（kāfir）である。そして，祝福多くいと高き我らの主（アッラー）は，敬虔な者の中から選んで僕たちにヤフヤー・イブン・ザカリーヤー（Yaḥyā b. Zakariyyā）という預言者を派遣され，その後にシャムウーンは亡くなった。その当時はアルダシール 1 世（Ardashīr Bābakān）が 14 年 10 か月間王として君臨し（malaka），彼の王位 8 年目にユダヤ教徒はヤフヤー・ブン・ザカリーヤー――彼に平安あれ――を殺害した。尊厳比類なき神が彼（ヤフヤー）を召し上げようと欲された時，彼（ヤフヤー）に「ワスィー性をシャムウーンの子（walad Sham‘ūn）に与え，十二使徒たちとイエスの従者たちに彼（シャムウーンの子）ともに実践（qiyām）するように」

啓示し給うた[40]。

この伝承中の「ヤフヤー・ブン・ザカリーヤー」とは，聖書でいうザカリヤの子ヨハネであり，キリスト教徒の主張するところの「洗礼者ヨハネ」である。イスラームではヨハネをイエスへの洗礼者とは見なさないが，イエスと同時代の預言者の 1 人と見なす。上記の伝承は，イエスからペトロへの後継者指名，および，ペトロからヨハネへの後継者指名，ヨハネからペトロの子への後継者指名という流れを詳細に説明している。ペトロがヨハネを後継者指名したという伝承はサドゥーク以外にも多くのシーア派学者たちの著作に収録されている[41]。この後継者指名という思想は，シーア派イマーム論における「指名（naṣṣ）」の先例であると位置づけられる。

ここで注意すべきは，上記の物語はシーア派の中で伝えられていたある種の超歴史的な物語であり，必ずしも新約聖書や歴史学的観点から支持されるものではないということである。新約聖書の記述や歴史学者たちによれば，ヨハネはイエスより前に処刑されているという[42]。それに対して，上記の伝承ではイエスが天に挙げられる直前にペトロを後継者指名し，ペトロは死に際にヨハネを後継者に指名したとされている。シーア派のペトロ観の解明を目的とする本稿では歴史学的な観点からシーア派思想の矛盾を追求することはせず，この伝承のシーア派思想史的価値を評価したい。ペトロとヨハネの関係性は，まさにキリスト教的伝統をシーア派が吸収して，同派のイマーム論に合致するように解釈を与えた結果であるとも考えられる。

（4）ペトロの奇跡

シーア派の主張するペトロの奇跡は，ハンセン病患者の治癒，盲人の目を見えるようにすること，および，死者の復活である。マスウーディーによれば，「（ペトロは）マスィーフ（メシア，イエスのこと）の行為を行い（kāna yafʿalu fiʻl al-Masīḥ），神の許しによって盲人，ハンセン病患者を治癒し，死者を復活させた」という[43]。

本稿第 2 節で見たように，クルアーンではイエスの奇跡としてハンセン病患者・盲人の治癒，死者の復活が挙げられている。マスウーディーがペトロの奇跡を「マスィーフの行為を行い」と述べたように，ペトロはイエスのワスィーとして，イエスが行った奇跡の一部を行うことができたと信じられている。

イスラームでは預言者ムハンマドも過去の預言者たちと同様に多くの奇跡を起こしたと信じられている[44]。さらにシーア派では，12 人のイマーム全員が預言者ムハンマド同様に奇跡を起こすことができると信じられている。イマームたちの奇跡に関する伝承は数え切れないほど多くあるが，ここでは 7 代目イマーム・カーズィムの奇跡に着目したい。シーア派で最も権威のあるハディース集『充全の書（*Kitāb al-Kāfī*）』によれば，ある日，イマーム・カーズィムは泣いている女性と子供の側を通りかかったという。イマームが彼女に泣いている理由を尋ねると，その女性は，自身が夫と死別しており，自身と子供が唯一の生活の糧にしていた雌牛が死んでしまい，2 人は路頭に迷っていると説明した。すると，イマームは 2 ラクア（ラクア rakʻa とは礼拝の中の 1 セットの動作のこと。つまり 2 ラクアは 2 セット）の礼拝をし，手を上に挙げ何かを言い，その後立ち上がり雌牛に話しかけ，牛を追い立てると，その雌牛が復活したという。雌牛が復活するのを見ると，その女性は「この御方はイーサー・ブン・マルヤム（イエス）です」と叫んだという[45]。

この伝承ではイマーム・カーズィムは雌牛を復活させたことで，イエスだと譬えられているのだが，シーア派イマームとイエス・ペトロとの奇跡における類似性が見て取れる伝承である。

(5) ペトロとシーア派イマームたちとの接点

上記の分析によって，シーア派伝承中におけるイマームたちとペトロの宗教上のワスィーとしての共通性が明らかになった。最後にペトロとイマームたちの物理的接点を明らかにしたい。シーア派思想の中でのペトロの重要性は，12 代目イマームの母方の血筋がペトロに帰されることでさらに強固なものとなっている。12 代目イマームの母親はナルジス（Narjis）という名前で，ビザンツ帝国の皇帝の孫娘であったと伝承されている。現代のシーア派学者フサイン・ムーサウィー・サーフィー（al-Sayyid Ḥusayn al-Mūsawī al-Ṣāfī）によれば，12 代目イマームの母ナルジスの父方の祖父はビザンツ皇帝で，母方の祖先はペトロであったと伝えられているという。また，ペトロは預言者ソロモン（スライマーン）の子孫であり，イエスの母マリヤの叔父の子であると伝えられているという[46]。

アリーらイマームたちとペトロは預言者のワスィーとして同様の宗教的地位をあると考えられていたが，最後のイマームたる 12 代目イマームにおいて，ペトロを介することで，預言者ダヴィデ（ダーウード）や預言者ソロモン（スライマーン）といったイスラエルの民の預言者たちの血筋が預言者ムハンマドの血筋と融合することになる[47]。このように，ペトロは現在のイマームの祖先と見なされることで，彼のシーア派思想史上の地位が確立される。

また，初代イマーム・アリーをペトロの子孫が表敬訪問するという伝承も多くの学者たちの文献に収録されている。ペトロの子孫の表敬訪問に関する伝承には若干のヴァリエーションがあるが，内容はおおむね次のようである。アリーとムアーウィヤ（Mu‘āwiya，ウマイヤ朝初代カリフ）がカリフ位を巡り争ったスィッフィーンの戦いの際に，ペトロの子孫がアリーを訪ね，アリーのイマーム位を支持し，アリーの軍勢を称賛したという[48]。

以上のように，シーア派伝承中ではペトロの子孫がアリーのイマーム位を承認したり，アリーの戦いを鼓舞したり，また，12 代目イマームの祖先にペトロが据えられることによって，ペトロとイマームの物理的接点が見出されている。

お わ り に

本稿ではスンナ派の思想と比較しながら，シーア派におけるペトロ観を分析してきた。クルアーンにはペトロについて直接的に言及する箇所はないものの，宗派を問わずイスラーム教徒の多くのクルアーン解釈者たちは，クルアーン 36 章 14 節の「3 人目（thālith）」という言葉がペトロを指すと理解してきた。シーア派はクルアーンのこの箇所の解釈に加えて，イマームたちに帰される伝承に基づいて，ペトロにワスィーという宗教的位置づけを与えているということがわかった。同派においてはペトロがイエスの正統な後継者として見なされており，ペトロが預言者ムハンマドのワスィーであるアリーの先例として位置づけられているということが分かった。また，ペトロはイエスとムハンマドの間の空白期間を埋める最初の存在として，同派のイマーム論において不可欠な存在となっていていると言える。

シーア派における上記のペトロ観の分析を通じて，シーア派の「キリスト教的伝承」の利用と解

釈の一端も明らかになった。シーア派はイマームたちの見解として積極的にキリスト教的物語を受け入れていた。ただし，シーア派に伝わる伝承はキリスト教徒の伝承とは異なる部分も多く，シーア派のイマーム論と調和させる形でペトロらの物語が受け入れられてきたと言える。シーア派イマームたちの性質をイエスとペトロらの中に見出すことで，同派のイマーム論を補強しようするシーア派の姿勢も指摘できるだろう。

同派におけるペトロに関する伝承の由来は様々な可能性が想定され，必ずしもキリスト教由来とは言えない。もちろんシーア派学者たちがキリスト教徒，ないし，キリスト教のテキストからペトロの伝承を学び，それらを同派の教義に取り入れたという可能性もあるだろう。しかしながら，これらの伝承がキリスト教文献から引用された形跡がないため，これらの思想が最初からシーア派の中にあった可能性も否定されない。このように，「キリスト教的伝承」の由来は定かではないものの，少なくもシーア派がキリスト教的伝統に類似する物語を利用し，同派のイマーム論を補強するために独自の解釈を与えてきたということは明らかである。

最後に，本稿から派生するシーア派とキリスト教の関係性に関する今後の研究の展望を示したい。シーア派伝承集では，ペトロやペトロの後継者とされる人々に関する記述は豊富にあるのに対して，彼と同時期にキリスト教の成立に携わったパウロに関する言及は少ない。ペトロらとパウロに関する記述の差やその内容の違いの分析は，イスラームとキリスト教の接点を見出すことにもつながるだろう。また，本稿はシーア派とキリスト教の比較の観点から，「イエスのワスィー」としてペトロ観を主題としたが，イエス以前の預言者たちや彼らのワスィーに関してもイスラームとキリスト教の比較研究の余地が多く残されている。

本稿は日本学術振興会特別研究員奨励費（課題番号 20J00302）の研究成果である。

注

1）松山洋平「クルアーンにおけるイエス」松山洋平（編）『クルアーン入門』，2018 年，447-468 頁；Mahdi Muntazir al-Qaim, *Jesus through Shi‘ite Narrations*（transl. M. Leganhausen）New York : Tahrike Tarsile Qur’an Inc., 2005.

2）本稿で「イスラーム」という用語を用いた場合，スンナ派とシーア派の両派に共通するイスラーム全体の合意事項，または，両派共通の多数説を意味する。また，本稿における「シーア派」が意味するのは，現在のシーア派の圧倒的多数派を占める「十二イマーム派」のことである。

3）菊地達也『イスラーム教「異端」と「正統」』講談社メチエ，2009 年，22-39 頁。

4）鎌田繁「アッラーマ・ヒッリーのイマーム論――『意図の解明・教義学綱要注釈』第五章訳注――」『東洋文化研究所紀要』118 巻，1992 年，119-192 頁。

5）フッジャ（ḥujja）が預言者たちとそのイマームたちを含む包括的な概念であるのに対して，ワスィーはイマームとほとんど同義で，預言者たちの死後における彼らの共同体の宗教指導者を指す。「イマーム」はとくに預言者ムハンマドの 12 人のワスィーを指す場合に用いられる。

6）Momen, M., *An Introduction to Shi‘i Islam,* New Haven and London : Yale University Press, 1985, xxi ; al-Mufīd, Muḥammad b. Muḥammad b. al-Nu‘mān, *al-Nukta al-I‘tiqādiyya,* n.p. : al-Mu’tamar al-‘Ālamī al-Alfiyya al-Shaykh al-Mufīd, 1413［1993］, 40-42.

7）イマームたちの中には生年や没年に関して複数の説が存在することもある。本稿では一般的に知られている没年だけを示した。

8）al-Kulaynī, Muḥammad b. Ya‘qūb, *Uṣūl al-Kāfī,* Beirut : Manshūrāt al-Fajr, 2007, vol.1, 103-104.

9）菊地，2009 年，174 頁；吉田京子「ヌウマーニーのガイバ論」『オリエント』36-2, 1993 年，19 頁。

10）松山『イスラーム神学』作品社、2016 年，339 頁。シーア派の伝承については，初期の伝承学者サッファールは自著の中で預言者の数を 12 万 4 千人とし，彼ら全員にワスィーがいたという伝承を引用してい

る。al-Ṣaffār al-Qummī, Muḥammad b al-Ḥasan, *Baṣā'ir al-Darajāt al-Kubrā,* n.p., Intishārāt al-Maktaba al-Ḥaydariyya, 1426［2005］, 251.

11）松山洋平「「不信仰の地」におけるイスラーム：マートゥリーディー学派における宣教未到達の民の信仰」『一神教世界』第 5 巻，93 頁。

12）現代のシーア派宗教権威（marja‘ al-taqlīd）の 1 人マカーレム・シーラーズィーによれば，この伝承や類似のテキストの伝承は真正性に疑いの余地のないほど多くの伝承（al-riwāyāt al-mutawātirāt）であるという。マカーレムはこの伝承の内容の正当性を補強するために，知性的推論に基づく証明も行っている。Makārem Shīrāzī, *Nafaḥāt al-Qur'ān : Uslūb Jadīd fi al-Tafsīr al-Mawḍū'ī li-al-Qur'ān al-Karīm,* n.p., Mu'assasa Abī Ṣāliḥ li-al-Nashr wa-al-Thaqāfa, n.d., vol.9, 89-92.

13）詳細は松山（2018 年，447-463 頁）を参照されたい。

14）本稿で引用するクルアーンの日本語訳については，中田考（監修）『日亜対訳クルアーン』（作品社，2014 年）を参照した。なお，本稿の他の記述に合うように，若干の変更を加えている箇所もある。

15）本稿における「シーア派」という用語は前述のように，現代のシーア派の圧倒的多数派を占める「十二イマーム派」のことである。イエスの磔刑の否定はスンナ派と十二イマーム派の中には異論はない。ただし，シーア派系の分派の中にはイエスの磔刑を受け入れる宗派もある。「十二イマーム派」の源流である「イマーム派」から 7 代目のイマーム位を巡って分派したイスマーイール派は，キリスト教同様にイエスは磔にされて死んだと主張している。Andani, K.,“They Killed Him Not : The Crucifixion in Shi‘a Isma‘ili Islam,”in http : //themathesontrust.org/papers/islam/andani-crucifixion.pdf, 2011.（2020 年 9 月 17 日最終閲覧）

16）松山，2018 年，463 頁。

17）松山，2018 年，463 頁。

18）以下にスンナ派ハディース集におけるマフディーに関する記述を列挙する。預言者ムハンマド曰く，「私の家族（ahl baytī）で名が私の名と同じであるところのアラブのある者が支配するまで現世は終わることはない（al-Tirmizhī 1983, vol.3, 343）」，「マフディーはその額が広く，鼻は高い。彼は以前に（地上が）不正と圧制で（jawran ẓulman）満ちていたように地上を公正と正義で（qisṭan ‘adlan）満たし，彼は 7 年間統治する（Abū Dāwūd, 1973, 475）」，「マフディーは我ら家門の人々から（min-nā ahl al-bayt）来る（Ibn Mājah 1366, vol.2, 1367）」。Abū Dāwūd, *Sunan Abī Dāwūd,* 4 vols, Ḥimṣ : Dār al-Ḥadīth, 1973 ; Ibn Mājah, *Sunan Ibn Māja,* 2 vols, Beirut : al-Maktaba al-‘Ilmiyya, n.d ; al-Tirmizhī, *Sunan al-Tirmizhī,* 5 vols, Beirut : Dār al-Fikr, 1983.

19）12 代目イマームが再臨すると，真のイスラームの教えを開示し，救世主として蜂起し，最終的に地上を正義で満たすとされる。シーア派における 12 代目イマームのメシアとして側面については，吉田（1993），鎌田（2013, 71-74）を参照されたい。シーア派において，イエスが 12 代目イマームの宰相として仕えることに関しては al-Nāṣirī（2007, 253-254）を参照。吉田京子，1993 年，18-33 頁；鎌田繁「マフディーとマイトレーヤ（弥勒仏）：イスラームと仏教における救済者」『一神教学際研究』8，2013 年，63-79 頁；al-Nāṣirī, M. A., *al-Imām al-Mahdī,* Tehrran : al-Jam‘ al-‘Ālamī li-al-Taqlīb bayn al-Madhāhib al-Islāmiyya, 1428［2007］.

20）Ḥusayn al-Mūsawī al-Ṣāfī, *Ummahāt al-A'imma al-Ma'ṣūmīn : Dirāsa Ta'rīkhiyya Taḥlīliyya 'Ilmiyya,* Karbalā' : Qism al-Shu'ūn al-Fikriyya wa-al-Thaqāfiyya fī al-‘Ataba al-Ḥusayniyya al-Muqaddasa, v.2, 221.

21）物語の要約の作成には，下記の資料を参照した。スンナ派の資料としては，al-Baghawī, Abū Muḥammad, *Tafsīr al-Baghawī,* Riyāḍ : 1412［1991-2］, vol.7, 11-12 ; al-Qurṭubī, Shams al-Dīn, *al-Jāmi‘ li-Aḥkām al-Qur'ān,* Beirut : Dār al-Risāla, 1428［2006］, vol.19, 424-426 ; al-Zamakhsharī, Maḥmūd b. ‘Umar, *Tafsīr al-Kashshāf,* Beirut : Dār al-Ma‘rifa, 1430［2009］；891；中田考（監訳）『タフスィール・アル＝ジャラーライン』日本サウディアラビア協会，2006 年，第 3 巻，189-192 頁を参照した。シーア派の資料としては ‘Alī b. Ibrāhīm al-Qummī, *Tafsīr al-Qummī,* Beirut : Mu'assasa al-A‘lā li-al-Maṭbū‘āt, 2014, 563-564 ; al-Ṭabāṭabā'ī, *al-Mīzān fī Tafsīr al-Qur'ān,* Qom, Manshūrāt Jamā‘a al-Mudarrisiyyin fī al-Ḥawza al-‘Ilmiyya, 1430［2009］, vol.17, 82-83.

22）al-Baghawī, 1991-2, vol.7, 11-12 ; al-Qurṭubī, 2006, vol.19, 425.

23）ムウタズィラ学派とはワースィル・イブン・アターゥ（Wāṣil b. ‘Aṭā', d.131/748）を始祖とするイスラームの中の神学派である。スンナ派の神学派の 1 つであるアシュアリー学派の創始者アシュアリー（Abū al-Ḥasan al-Ash‘arī, d.324/939）は当初はムウタズィラ学派を信奉していたが，後に同神学派を離れスンナ派に転向したという（松山，2018 年，34 頁）。本文で言及したザマフシャリーはムウタズィラ学派でありながら，クルアーンの文言を文法学的に厳密に分析したため，彼のクルアーン解釈書は後の多くのスンナ派

学者たちに参照された。小杉泰「ザマフシャリー」『岩波イスラーム辞典』岩波書店，2009 年，413 頁。

24）後述のようにキリスト教でいう洗礼者ヨハネはアラビア語ではヤフヤー・イブン・ザカリーヤー（Yaḥyā b. Zakariyyā）と呼ばれる。それに対して，ここで筆者が「ヨハネ」と表記した人物のアラビア語名はユーフナー（Yūḥnā）である。そのため，後者はイエスの弟子であった使徒ヨハネを指すものと推察される。

25）Ibn Kathīr, *Tafsīr al-Qur'ān al-Karīm,* Riyāḍ : Dār Ṭayyiba li-al-Nashr wa-al-Tawzī', 1420［1999］, vol.6, 569.

26）al-Ṭabāṭabā'ī, 2009, vol.17, 82-83.

27）吉田，1993 年，18-33 頁。

28）同書がマスウーディーの手によって書かれたものであるかどうかについては，否定的に考える研究者もいる（Pierce, M., *Twelve Infallible Men : The Imams and the Making of Shi'ism,* Cambridge, Massachusetts, London : Harvard University Press, 2016, 22）。そのため，本稿では同書の真正性を考慮したうえで，同時代のシーア派学者たちやその解釈者たちがマスウーディーと同じ主張をしていることを確認している。

29）al-Maṣ'ūdī, 'Alī b. al-Ḥasan, *Ithbāt al-Waṣiyyah li-al-Imām 'Alī b. Abī Ṭālib,* Beirut : Dār al-Aḍwā', 1988, 89.

30）筆者の拙論で指摘したように，874 年に 12 代目イマームが信徒の前から姿を消したことによって学者たちによる宗教書の執筆が盛んになった。そのため，イマームが姿を隠す 874 年より前の時代のシーア派文献の数は非常に少なく，ほとんど現存していない（拙論「初期十二イマーム派における「秘教」と「顕教」－小幽隠期のハディース集とタフスィールの分析を通じて－」『一神教世界』第 9 巻，2018 年，118-121 頁）。『スライムの書』は数少ないイマームお隠れ以前の文献である。

31）Sulaym b. Qays al-Hilālī, *Kitāb Sulaym b. Qays al-Hilālī,* Qom : Nashr al-Hādī, 1420［1999-2000］, 252, 332.

32）『スライムの書』はアバーン・イブン・アビー・アイヤーシュ（Abān b. Abī 'Ayyāsh, d.138/755-756）によって改竄されたという考える人物学者もいるである。Modarressi, H., *Tradition and Survival : A Bibliographical Survey of Early Shī'ite Literature,* Oxford : Oneworld, 2003, 85 ; Amir-Moezzi, "Note bibligraphique sur *Kitāb Sulaym b. Qays,* le plus ancient ouvrage shi'ite existant," in *Le shī'isme imāmite quarante ans après : hommage à Etan Kohlberg*（ed. Amir-Moezzi, Bar-Asher, and S. Hopkins）, Turnhout : Brepols, 2009, 37.

33）伝承の文言や内容に多少のヴァリエーションはあるものの，「ペトロがイエスのワスィー」であることを明示する伝承は，筆者が調べられた限りでも，10 世紀末の伝承主義学者サッファール・クンミー（al-Ṣaffār al-Qummī, d.290/902-3），11 世紀以降シーア派の主流となる合理主義的潮流の代表的な学者シャイフ・トゥースィー（Shaykh al-Ṭā'ifa al-Ṭūsī, d.460/1067），13 世紀の法学者シャーザーン・ブン・ジブリール・クンミー（al-Shādhān b. Jibrīl al-Qummī, d.660/1261-2），サファヴィー朝期の伝承主義の碩学ムハンマド・バーキル・マジュリスィー（Muḥammad al-Bāqir al-Majlsī, d.1111/1699），現代におけるクルアーン解釈の権威である前述のタバータバーイーら各時代のシーア派を代表する学者たちが引用している。al-Ṣaffār, Muḥammad b. al-Ḥasan al-Qummī, *Baṣā'ir al-Darajāt fī Faḍā'il Āl Muḥammd,* 2 vols, Qom : Intishārāt al-Maktaba al-Ḥaydarīya, 1426［2005-6］, vol.1, 209 ; al-Shaykh al-Ṭūsī, *al-Amālī,* Qom ; Dār al-Thaqāfa, 1414［1993-4］, 591-592 ; al-Shāzhān b. Jibrīl al-Qummī, *al-Rawḍa fī Faḍā'il Amīr al-Mu'minīn 'Alī b. Abī Ṭālib,* Qom : Maktaba al-Amīn, 1423［2002-3］, 34 : al-Majlisī, Muḥammad al-Bāqir, *Biḥār al-Anwār,* 110 vols, Beirut : Dār Iḥyā' al-Turāth al-'Arabī, 1983, vol.28, 5 ; al-Ṭabāṭabā'ī, 1430［2009］, vol.17, 82-83. なお，シーア派内における伝承主義的潮流と合理主義的潮流の成立と相違に関しては，拙論「現代シーア派学者によるムウタズィラ派採用論批判の考察――ハーメネイーのムフィード（d.413/1022）観に焦点をあてて――」『一神教世界』10, 2019 年，99-119 頁を参照されたい。

34）al-Shahrastānī, Abū al-Fatḥ, *Kitāb al-Milal wa-al-Niḥal,* 2 vols, Cairo : Maktaba al-Anjlū al-Miṣrīya, n.d., vol.1, 20 ; al-'Ayyāshī, Muḥammad b. al-Mas'ūd, *Tafsīr al-'Ayyāshī,* Beirut : Mu'assasa al-A'lā, 1991, vol.1, 359-360.

35）Sulaym, 1999-2000, 332. なお，Sulaym, 1999-2000, 433-434 にも類似の伝承が収録されている。

36）al-Majlisī, 1983, vol.28, 4-5 ; 'Imād al-Dīn al-Ṭabarī, *Bushāra al-Muṣṭafā li-Shī'a al-Murtaḍā,* 2 vols, Qom : Mu'assasa al-Nashr al-Islāmī, 1422［2001-2］, vol.1, 334.

37）Furāt al-Kūfī, *Tafsīr Furāt,* 2 vols, Beirut : Mu'assasa al-Ta'rīkh al-'Arabī, 2011, vol.2, 378 ; al-Majlisī, 1983, vol.35, 26-27.

38）al-Mas'ūdī, 1988, 89 ; Sulaym, 1999-2000, 252.

39）al-Majlisī, 1983, vol.23, 58.

40）al-Ṣadūq, *Kamāl al-Dīn wa-Tamām al-Ni'ma,* 2 vols, Jamkarān : Enteshārāt-e Masjed-e Mooqqades-e Jamkarān, 1390［2011］, vol.1, 427.

41）al-Fayḍ al-Kāshānī, *al-Wāfī,* 26 vols, Eṣfahān : Ketābkhāne-ye Emām Amir al-Mu'minīn 'Alī 'Alay-hi al-Salām, 1406［1985-6］, vol.2, 295 ; al-Ḥurr al-Āmilī, *Ithbāt al-Hudāt,* 5 vols, Beirut : Mu'assasa al-A'lā, 1422［2001-2］, vol.2, 36 ; al-Majlisī, 1983, vol.23, 58.

42）山形孝夫『図説新約物語：新約篇』河出書房，2017 年，45-47 頁。

43）al-Mas'ūdī, 1988, 89

44）松山によれば，預言者ムハンマドの奇跡を伝える伝承は大量にあり，一説では 17 万もの奇跡が伝えられているという（松山 2016, 353-355）。

45）al-Kulaynī, 2007, vol.1, 309.

46）Ḥusayn al-Mūsawī al-Ṣāfī, 2015, vol.2, 219-224.

47）イスラームではダヴィデ（ダーウード）とソロモン（スライマーン）はイスラエルの民の王国の王であったのみならず，預言者であったと信じられている。ムハンマドが聖典としてのクルアーンを神から受け取ったように，ダヴィデは聖典としての『詩篇（al-Zabūr）』を神から受け取ったとされる。クルアーン 17 章 15 節参照。

48）Sulaym, 1999-2000, 252-255 ; al-Nu'mānī *Ghayba al-Nu'mānī,* Jamkarān : Enteshrāt-e Masjid-e Moqaddas-e Jamkarān, 2012, 145-147 ; al-Mufīd, *al-Amālī,* Lebanon : Dār al-Tayyār al-Jadīd, n.d., 104-106.